

漢蘭折衷ということ

漢方京口門診療所 山崎正寿

今年の4月末に日本医史学会学術総会が、大阪船場の日本綿業倶楽部(重要文化財指定建築物)で開かれた。開催に先立ち大阪中之島公園内に、華岡流外科の大阪での分塾である「合水堂」の顕彰碑が設立され、その除幕式がおこなわれた。「合水堂」は和歌山にあった華岡青洲の「春林軒」の分塾として、末弟の鹿城が1816(文化13)年に設立し、1838(天保9)年に設立された緒方洪庵の適塾とは別に、多くの全国の医家を育てた。華岡の合水堂は、吉益流の漢方と蘭方の外科や産科を学ぶところで、適塾の蘭学重視とは少し内容を異にする。

華岡流医学では吉益流の古方漢方を内科の治療とし、蘭方の外科学や賀川流産科術を学んだといわれる。すなわち漢蘭折衷の医学といえる。青洲の考えの基本は「内外合一、活物窮理」といわれる。青洲の燈下医談には、「外科を為さんと欲せば、先ず内科を精すべし。然らざれば治術に益なし」と云っている。また「蘭(方)という者は、理に密にして法(治法)に僉し。漢(方)を奉ずる者は、法に精しくして跡に泥む」といい、理屈は蘭方であるが、治療は漢方にあるも、先人の説に拘泥する傾向があると言っている。だから、「わが術(医術)は、治を活物に考え、法を窮理に出ず」と主張している。

「内外合一、活物窮理」というと労働組合運動のスローガンのように聞こえるが、その内容を詳しく見てみると、大変示唆にとんだ、今日的な内容を含んでいるように思える。

青洲は漢方を吉益南涯に学んだといわれる。南涯はよく知られているように、古方派の泰斗である吉益東洞の長子である。東洞の医学の姿勢は「親試実験」といわれ、伝統的思考にとらわれず、目の前の病める人から知り学び、治療を工夫、開発することにあつた。特に東洞の「藁徴」はその代表的な成果と言えよう。すなわち青洲の「活物窮理」は東洞の「親試実験」につながっているとみえる。

そして、興味深いことに、蘭方医学を学ぶことに積極的であったのは、当時の漢方の後世派や折衷派ではなく、吉益流の古方派であったことである。つまり伝統的な思考に泥んでいる者には、新しいものへの興味関心が薄く、積極果敢な行動を取りにくいといえる。華岡青洲はまさに東洞・南涯以来の革新的発想をもとに、当時の最新の外科学を学び、それを治療に応用していったのである。

青洲といえば、麻沸散による全身麻酔下での世界初の乳癌手術があまりに有名であるが、そこに至る青洲の考えの過程こそ大切なことのように思える。

長年青洲の治療を研究されてきた麻酔科の松木弘前大学名誉教授は、青洲が全身麻酔下の乳癌手術をするに当って、それ以前に麻沸散の臨床実験を十数人のボランティアに行い成功したことが知られていると言われた。現代医学にも劣らない慎重な態度で研究にのぞんでいたようである。さらに、乳癌の手術に当ってはさらに慎重に行っていて、第1例の手術をした患者は、術後4ヶ月ほどで亡くなっていて、その後の乳癌手術は1年3ヶ月の間をおいてなされている。つまり青洲は最初の手術は失敗とみて、その反省をするために、次の手術を先延ばししたように窺えるとのこと。ここでも、極めて慎重な態度で取り組んでいる。そして青洲生存中の乳癌手術患者は154名で、松木先生の研究によれば、そのうち生存日数の判明した患者は33名で、平均54ヶ月(4年半)生存したことが判ったという。すなわち判明しただけでも大変優秀な手術成績であり、明治時代の某大学外科の胃癌手術の、術後1か月以内の生存率が33.1%であるのと比べても、大変優れているとのことである。

青洲が世界初の全身麻酔下で乳癌手術をおこなったことは、もちろん偉大なことであるが、そこに至る過程、また実践の成果には目を見張るものがある。最近のどこかの研究者のように発見、発見と大々的に発表した後、全く証明できなかったのとは雲泥の差といえる。江戸期の医者たちのすごさに感嘆せざるをえない。